

元福音派と呼ばれないために

－神学学徒論のすすめ－

目 次

- 1、はじめに
- 2、何故、霊性の神学がないのか。
- 3、神学学徒論のすすめ
- 4、むすび

1、はじめに

アリストター・マグラスは「キリスト教の将来と福音主義」(いのちのことば社)の中で「私は理由あって、楽観的な見方でこの章を終える。…福音主義は、霊性の世界の眠れる巨人である。…目覚めたなら、来るべき千年間には非常に華々しい展開が見られるであろう。」(p195)と福音主義に対する励ましと期待を語っています。他方「もし福音主義の将来に何らかの長期的な脅威があるとしたら、それは霊性に対する注目不足である可能性が高い。徹底して福音主義的な源泉と見解を持つ形態を生み出すか再発見しない限り、今日の福音派は、明日に元福音派になるであろう。これはわれわれが今日直面している、最も緊急な責務の一つである。」(p194)と警鐘を鳴らし、さらに福音派の霊性の教育に関しては、バンクーバーのリージエント・カレッジに例外的に講座が設けられているだけで、福音派の神学校の盲点となっていると指摘し (p 189)、福音派の霊性に関する教育の急務を促しています。

2、何故、靈性の神学がないのか。

1) 実際の靈的生活の訓練と実践

アリストアー・マグラスが「福音主義の特徴的な性格は神学よりも敬虔な気風にある。」(p189)と指摘している通り、私自身、靈性(Spirituality・靈的であること)について、神学的に扱うよりはむしろ、敬虔の気風を養うことの中で理解しようとしてきました。ですから、いざ靈的であること(靈性)とはどういうことなのかと問われると、言葉に表現しにくいものがあります。

私が伝道師牧師としての訓練を受けたのは、私の所属する教団立の全寮制3年間の聖書学塾と呼ばれる聖書学校でした。当時、牧師兼塾長兼舎監の先生の牧師館に数人の生徒が同居しながら、学びと訓練を受けていました。

入塾してすぐ、「ここはトレーニング・スクールですから」と申し渡されました。

その意味するところは「聖書やその他の知的な学びを中心とするよりは、人格的、靈的、伝道師牧師としてのあるべき生活の訓練と奉仕の実践的訓練の場である。」

と私なりに理解しました。今でこそ「神学」という言葉は私達の教団でも、ごくあたりまえに使っていますが、当時、あまり聞いた覚えがありません。まさに、敬虔の気風を訓練することを中心とするものでした。この敬虔の訓練については、私達の団体でごく日常的に使われていた言葉は、いろいろな意味で「靈的な人として整えられる」という事でした。それは潔められ、聖霊に満たされ、キリストに似たものとされ、御霊の実を結ぶ事によって、主にとって有益なものとなり、あらゆるよいわざに間に合うものとなることでした。一言で言えば、潔めの経験であり、聖化であり、イエス・キリストの良き証人となることでした。しかし、これは私と私の所属する教団だけではなく、日本にある多くの聖書学校に共通する、あたらずといえども遠からずの現状ではないでしょうか。

しかし、この神学軽視の傾向は、敬虔の気風を重んじたからだというだけでなく、日本に伝えられたキリスト教それ自身や、時代や、それを受容した日本とい

う土壌の問題等、意外と根深い所にその問題の本質が隠されているのではないのでしょうか。

2) 伝道至上主義

伝道至上主義は靈性の神学に取り組みせない原因の一つではないのでしょうか。日本の教会の多くが、十八世紀にイギリスに始まり、ドイツ・北欧そして、十九世紀アメリカ及びカナダのリバイバル運動(石原謙著作集第十巻)(岩波書店)(p6)による、伝道至上主義の強い影響下にあります。そこでは勢い、伝道師や牧師自らが潔められ聖霊に満たされ靈的な人となることも、靈的な信徒を育てることも、又様々な実際的信徒訓練も、突き詰めると伝道のための手段とする傾向が強かったのではないのでしょうか。伝道という目的に教会が機能するような教会理解が支配的だったように思います。

岩井素子氏は、神に栄光を帰すという人生の目的のために、教育の第二義的な目標として救い、再生、回復、聖化を挙げています「キリスト教教育」(日本カルヴィニスト協会刊)(p15)。しかし、少なからず20年前までの私は、魂の救い、即ち伝道を教会の第一義的な目的とする強い傾向を持っていました。たとえ神の栄光を現わす良き教育と訓練の方法や、教会観や論を持っていたとしても、魂が救われ信徒の群れが出来なければ何も始まらないと考えていました。既成教会に遣わされた場合は、既に信徒の群れがそこにありますから、最優先する傾向は避けられたかもしれせん。しかし、開拓伝道に遣わされ場合、とにかく一人でも救われ、信徒が与えられる事が最重要課題でありました。しかも「聖化」について、岩井素子が神の栄光を現わすという目的のために従属的目標として捉えたのとは異なり、全てではないにしても、聖化を伝道のための従属的目標とする傾向がありました。所謂「潔められなければ伝道は成功しない」と言った考えです。その上、聖化を教会の聖化というような捉え方もなく、極めて個人の敬虔の

範疇で捉えるというものでした。さらに聖化をとりあつかう時、言葉と行為を生み出す動機としての価値観や思想や世界観までは、視野に置いていましたが、もう一步掘り下げ、価値観や思想や世界観を生み出してくる「思想の製造所」としての「思い」(M・A・バーネット『ロマ書註解』・Matthew Henry's Commentary 8章5節)にまでは深められませんでした。そして、どうしても潔められた結果、見える形での道徳的倫理的な現れと伝道の実について、勢い強調する傾向がありました。さらに、明治以来西洋文化を取り入れる時の和魂洋才の考え方が、私の中にも教会の中にも受け継がれ、「ハウ・ツウー」という方法論が優先し、「神様の前にどうあるべきか」と言った、靈性への問いかけを促す「ノウ・ホワット」や「ノウ・ホワイ」の方向性は十分とは言えませんでした。勿論、全くなかったわけではなく、しかし、この問いを真摯に受け止め、奉仕者自らが問い、信徒にも問いかけながら教会形成を進めるといったあり方は、「今度の伝道集会に何人集まった。」「今年は何人受洗者が与えられた。」「礼拝出席者が何人になった。」といった伝道至上主義の声にかき消されてきたように思います。確かに「伝道という目標のために、教会が機能(手段化)する」という理解が間違っているわけではありません。石田順朗氏も「教会の伝道」(聖文社)で「教会は、伝道の『手段』であり、同時に、その『目標』であるという同時性について」(p86)語っています。ですから、伝道至上主義の弱点を乗り越えるために、伝道と教会の目標と手段の同時性を認めつつ、しかし、思い切って「教会形成のため(目標)に、伝道が機能(手段化)する」という方向へシフトする必要があるように思っています。そして靈性についても「効率良い伝道のための靈性はどうあるべきか」といった捉え方に流れるのを防ぐ意味でも教会論的視点で捉える必要があるのではないのでしょうか。

3) 聖霊万能主義

石原謙氏は日本教会の法的性格の弱さを指摘しました。「石原謙著作集10巻」(岩波書店)(p214)又、井戸垣彰氏も「信教の自由と日本の教会」(いのちのことば社)で「教会に於ける法の重要さは、どんなに強調しても強調し過ぎることはないと思う。」と述べた後「教会における法の代表的なものは、信仰告白であろう。……信仰告白こそ教会を導くものでなければならない。」(p141)と指摘しています。日本の教会の法的性格の弱さは行き着くところ信仰告白を重んじないところに、その主要な原因があるように思います。

熊野義孝氏はプロテスタント教会の特に監督派について、教職制度と聖礼典の解釈についてロ・マ・カトリックに近く、反ロ・マ的な人々はかえって主観的な敬虔派に近づき、信条については甚だ無頓着な傾向を持つ(熊野義孝全集5)(p490)と指摘しています。さらに渡辺信夫氏は「神と魂と世界と」(白水社)で「法というものを意義付ける事ができる方向にある神学思考とそうでない神学思考とがある……前者は『神の言葉の神学』であり、後者は『霊の神学』として性格づけることができよう。霊の神学は霊に満たされた状態に達すれば一切の外的規定が不要になると主張する。」(p199-200)と指摘しています。確かに、きよめ派に属すると言われている私達の教団では、長い間、強いリーダーによる監督的な政治がなされてきました。又、生活を通しての証しや伝道の熱心を大切にし、聖霊に満たされることを強く求めてきました。これらを重視してきたために、信仰告白や、神学も、無意識的に軽視する傾向があったように思います。この傾向は、日本の多くのきよめ派や聖霊を強調するグループの特徴のように思います。勿論、聖霊を強調する事が間違っているわけではありません。しかし同時に、それが全てであるかのように思っている事にとどまっていたら、神学的思考はいつまで経っても成熟していかないし、霊性に関して、神学的取り組みを始めることは出来ないでしょう。

4) 告白なくして、神学なし

勿論、日本の福音派の教会には、神学を比較的重んじる改革派系や長老派系の教会もあるわけですが、それでも、マグラスによれば、福音主義の特徴として神学軽視を挙げています。いわんや、私達の教団では、神学的弱さは否めません。それは、「神学即自由主義神学。神学を学ぶと聖書信仰がおかしくなる。神学は人を傲慢にする。神学で人を救いに導く事は出来ない。神学する時間があったらトラクト一枚配った方が良い」と言った偏見と、短絡的皮相的で、軽率とも思える神学否定論が過去にあったことは否めません。もし神学を「単に神の存在に関わる議論や理説ではなく教会の実存に根ざすところの自覚反省である。」(熊野義孝全集4)(p207)とすれば、神学がなければ教会の自覚も反省もなされず、従って聖書的な教会形成もあり得えず「神学なくして教会なし」となるでしょう。他方「教会の自己主張を明らかにし、その弁明や弁証に仕えるということによって、神学はただちに教会的自覚の展開である」(熊野義孝全集4)(p203)とするならば、教会がなければ教会の自己主張も教会的自覚もありようがありませんから、神学そのものが根拠を失い「教会なくして神学なし」となるでしょう。しかも「信条は教理と神学とを生み出す母胎である」(熊野義孝全集5)(p485)とするならば、福音派の神学的未成熟とは、結局教会それ自身の不確かであり、それは同時に、信条(信仰告白)の軽視と信仰告白に生きることへの不徹底さに原因していることになるでしょう。「この信条ないし告白の基礎を欠いている集団においては、たといそれが自分を教会と呼んでいるにしても、神学は営まれ得ない」(熊野義孝全集4)(p206)と指摘している通り、「信仰告白なくして神学なし」となります。このように神学それ自体が十分に営まれぬ福音派の環境下に於いては、霊性の神学的考察は大変難しい課題となるのではないのでしょうか。

3、神学学徒論のすすめ

では、今後、神学的に考察する事が弱いとされる福音派は、靈性の神学どのように展開していったら良いのでしょうか。勿論、福音主義神学が未成熟なのは、敬虔の気風を重んじ、信仰告白を軽視した教会論の未成熟が考えられます。従って福音派の教会論を確立する事は急務であり必至のことです。しかし、ここでは今後の研究と成果を待つとして、教会論と密接に関連させつつ、神学学徒論を確立することが必要ではないかと考えています。

1) 神学学徒とは誰なのか。

神学学徒とは、神学を学ぶ生徒、神学をする人のことですが、一体誰れのことでしょうか。神学教育とは伝道者牧師宣教師或いは神学教師として召されて献身した人のために施されてきましたから、一般的には教職者を指しています。

ところで、すべてのキリスト者（信徒）が神のみ前に等しく恵みを与えられ、同時に神に対する応答と、その働きに召されていること、そして教会における信徒の責任ある立場や位置を再発見したのは宗教改革でした。いわゆるルターの発見した「万人祭司」の原理は、聖書のみことばに根拠を置き、教職（聖）と信徒（俗）との差別を基本的に取り除きました。使徒信条には「聖なる公同の教会、聖徒の交わり」とありますが、これを再確認したのがアウグスブルグ信仰告白（1530年）です。その第七条には「教会は聖徒の会衆（congregatio）であって、そこで福音が純粹に教えられ聖礼典が福音に従って正しく執行せられるのである。」とあり、（信条集前後、新教出版社）プロテスタントの教会理解を「聖徒の交わり」であり「聖徒の会衆」としたのです。

ところが、次第に聖徒の会衆である真の教会のしるしは、みことばの純粹な説教と聖礼典の二つだけでなく、第三のしるしが求められるようになっていきました。それは訓練と戒規です。スコットランド信条（1560年）そしてベルギー信条

(1561年)さらに、第二スイス信条(1566年)等によれば、教会訓練から教会戒規そして教職者にまで広げられていく様子が解ります。このように真の教会の第三のしるしに向かっていく変化は、真の教会といつわりの教会を峻別するのにとどまらず、真の教会を形成することへ展開して行き、そのために教職者の訓練が大切な事として扱われることになりました。従ってこの過程で、プロテスタントの教会がカトリック教会にあった教職と信徒との差別を取り除いたはずなのに、再び区分が生じ、信徒の役割を教職に対して補助的なものと位置づけしまった歴史があります。ジョン・ストットも「今求められる牧師と信徒のあり方」(原題, One People)(いのちのことば社)で「実際的には、教会戒規の問題が牧師偏重主義の台頭するおもな原因ではないだろうか。」(p43)と指摘しています。このような牧師偏重主義が神学を教職者だけのものにしてきたのではないのでしょうか。又、宇田進氏は座談会の中で「神学とは神へと生きることの学である。」とウィリヤム・エイムズを理解を紹介しています。もし神学を神へと生きることの「学」であるとするならば、神へと生きる者は、何も伝道師牧師宣教師や神学教師、いわゆる教職者に限った事ではなく、全ての信徒に適用されるはずで、その意味で神学学徒とは教職者だけでなく、キリストの教会に所属する全信徒でなければなりません。

2) 全信徒の神学へ促し

H・クレーマーは「信徒の神学」(新教出版社)で「神学は専門化した特殊な関心ではなく、すべてのキリスト者の仕事である」(p122)。信徒の神学は「信徒のための神学」ではなく(p12)「信徒にたいする神学への要求である」(p230)と言っています。又「総説実践神学」(日本基督教団出版局)で今橋朗氏は「神学教育とは従来、教職養成の意味にのみ用いられる用語としての傾向が強かった。しかし、神の民共同体全体に関わる神学的教育は、当然、信徒の問題としても取り

上げられねばならない。」(p211) と語っています。

今日まで神学教育の多くは、教職者のために、神学校で施されてきました。その結果、どうしても教職者に比重を置くものとなる傾向がありました。確かに信徒のための神学教育として、レーマン・スクールとか、拡大神学教育という形であることはあります。しかし、信徒の役割を教職に対して補助的なものと位置づけている限り、信徒への神学教育はどうしても「信徒のための神学教育」となり、教職者のための教育レベルよりは一段下げ、より実践に重点を置く傾向が強く、従属的な教育となっていたのではないのでしょうか。しかし、全信徒は神学学徒であるという理解に立つ時、教職も信徒も神学を学ぶ生徒であり、神学をする人となります。それは、信徒に対して神学することを強く促すこととなります。その意味では信徒による神学の形成とも言えるでしょう。そしてそれは、信徒が教職者の神学的考察から得られた結果をただ与えら、受け取るだけでなく、反対に信徒自身が積極的に、主体的に神学し、自らが神へと生きることを学び、御言葉を実践することになるでしょう。しかし、この事は決して教職者不用論を言っているわけではありません。全信徒は神学学徒なのですから、当然教職者も神学することとなります。むしろ、教職者と信徒の交わりと対話の中で共に神学を営むことでなければなりません。この事は言い換えれば、教会が神学することでもありません。神学は、信徒という個人、教職者という個人の営みでなく、教会の営みでなければなりません。ですから、神学学徒論のすすめは、教会が神学することを取り戻す事にもなり、それは又、神学の復権ともいえるのではないのでしょうか。

3) 霊性の神学と神学学徒論の関係

全信徒を神学学徒と位置づけ、神学することへの強い促しがなされる時、教職も含めた全信徒は信仰と生活の全ての領域に対して、当然「何故か？」を問うことを教会の機能の一つとしてはじめることとなります。そして、その問いは、問う

人自身も問われることとなります。例えば、神学学徒は神の前にどうあるべきなのか。何を知るべきなのか。どう生きるべきなのか。即ち、Being や knowing や Doing の三方向への問いをもつ足場が確立することとなります。このようにして、靈性について神学的に考察をする立場が確保されることとなります。

ところで熊野義孝氏は、1952年（昭和27年）に「神学諸科解題」を著わしましたが、熊野氏自身が比較的穏当で便利と考える分類の第七章で「神学学徒」を挙げています。そして「プロテスタント学徒において、神学への途は特別な訓練を要すると考える。學術の仕方についてではなく（それは当然である）、學究の態度そのものに特殊性が存するはずである。」（熊野義孝全集第四巻）（新教出版）（p283）と言っています。そこではいわゆる靈性の神学で取り上げるような内容が示されています。しかも、実践部門ではなく改めて章を設けてその必要性を説いているのは、大変貴重な指摘ではないでしょうか。他方、森野善衛門氏は靈性に関する内容を「総説 実践神学」（日本基督教団出版局）で、「教会（キリスト者）の実践を問う学としての実践神学（Theologia practica）は伝統的に教会（キリスト者）の靈的生活（Vita spiritualis）の形成と訓練（デシプリン）に仕える学としての使命を担う分科として重んじられてきた。」（p238）とし、応答する人間、即ち、神学をする人、それ自身の神の前におけるあり方、生き方、生活について、実践神学の諸部門の最終章で論じ、熊野義孝が取り上げた神学学徒論をむしろ実践神学の中に位置づけ、比較的詳しく（p256～263）取り上げています。しかし、神の言葉に応答する人自身が聖書的に整えられて、初めて教会の実践を神学的に考察する姿勢が確立するわけで、信仰者はどうあるべきなのかを問う、神学学徒論は実践神学序説で論じる事も可能ではないでしょうか。神学学徒論を、熊野義孝のように実践神学とは別に設けて論じるべきなのか。森野善衛門氏のように実践神学の中に位置づけるのか。今後の課題ではないでしょうか。しかし、いずれにしる神学学徒論の確立は大切ではないでしょうか。

4、むすび

教会は信徒の交わりです。その中に教職に召された信徒とその他の働きに召された信徒がいます。そして、神学が神へと生きる学であるとするならば、全信徒は神学を学ぶ生徒です。この理解に立って、教会は、教職も信徒も共に神学学徒であるという自覚を育て、神学を学ぶ者の姿勢を問う形で、霊性について神学的に考察をする事が大切ではないでしょうか。既に、東京基督教大学が教職者以外の信徒も神学的素養を身につける必要があるとして、国際キリスト教学科を文学部の下でなく神学部の下に、しかも神学科と併設しているのは大変励まされる事実です。

最後に、渡辺信夫氏が「スピリチュアリティ」ということが日本の教会でも盛んに言われるようになってきた事に関して「ただ、流行語としての、魂不在のスピリチュアリティでは滑稽にしか聞こえないのではないのでしょうか。言葉が軽すぎます。自分の言葉になっていないのです」(教会が教会であるために)(新教出版社)(p56)との指摘を自戒としつつ、慎重に霊性の神学を展開し、霊性について自分の言葉を持つ者でありたいと願っています。

以上